NO. 109

蓬左 HÔSA

大炊御門家文書

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY, CITY OF NAGOYA

『銅人経』拓本を探る!?⑤

『銅人経』「裏打紙文書」の史料的価値
―明朝と日常業務―

東北大学教授　大野晃嗣

「中国史」は、若者に人気があるのか。地方大学に奉職する執筆者にとって、この問いかけの答えを直接実感する機会は、新入生による研究室訪問のイベントと、高校生が雲霞の如く押し寄せる夏のオープンキャンパスである。今年の4月も、つい先日まで高校生であった多くの新入生が、勤務先の東洋史研究室を訪問してくれた。ほとんど訪問者がいなかったとぼやく同僚や、研究室の外まで長蛇の列ができ、疲労困憊している教員がいることを考えれば、ほどほどの人気という答えとなろう。

それでは、彼・彼女たちは「中国史」のどのような事象に興味をもつのであろうか。それをたずねると、『キングダム』『パリピ孔明』『薬屋のひとりごと』といった漫画やアニメの名を答えるものが過半であった。浅田次郎『蒼穹の昴』やゲーム『三国志』という回答はこのところ聞かなくなったが、一方で「司馬遼太郎『項羽と劉邦』です」と、目を輝かせながら答えた学生がいたのが、今年の印象に残った。

これらのことから、彼・彼女らにとって身近な「中国史」とは、英雄やリーダー達が常に肉体と知能の極限を競いあったり、権謀術数の限りを尽くして渡り合ったりするものということになるのであろう。非日常性が人の興味と関心をかき立てるという点から見れば、確かに「中国史」はその手の宝庫である。ただ本文庫が所蔵する『銅人腧穴鍼灸図経』（以下、『銅人経』）が関わる明朝（一三六八―一六四四）をとってみても、そのような事象は時代の一側面であり、大方の平和な日常は、全く別の顔つきをしている。

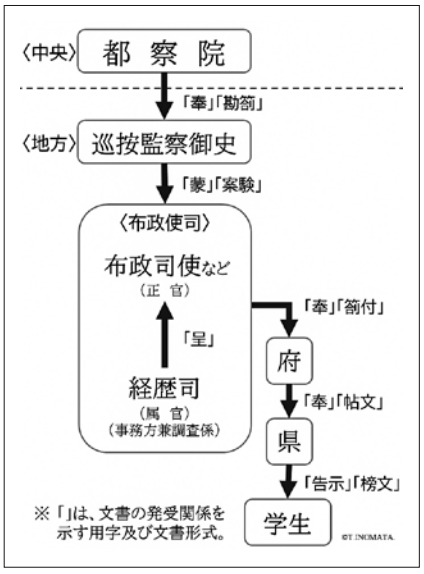
明朝と文書主義による業務の遂行

すでに、『蓬左』一〇五号、一〇八号などにおいて、井上、猪俣から詳細な紹介がされているように、『銅人経』には裏打紙として明朝万暦（一五七三―一六二〇）年間後半の行政文書が利用されている。以下、この「裏打紙文書」が、なぜ貴重なのか、どういう点で歴史研究に有用なのかを紹介したい。

明朝は、皇帝が君臨し、手足となる官僚機構を使って広い国土と膨大な人民を統治した中央集権的官僚制国家である。そして、歴代中国王朝に共通するように、行政を運営する上で必要な事柄は、しかるべき相手と文書をやりとりし、残すべき実績は文書に記録して保存した。またその運営の過程で、依るべき法律や先例がある場合には、それを記録の中から引用して新たな意志決定の根拠とすることも必要であった。この文書主義こそが行政運営の基本的な方針・手続きとなっていたのである。

文書主義は、国家の根本法典である「律」を補う「条例」の制定といった大事の手続きのみならず、日常的な細々とした業務の遂行にも及ぶ。『銅人経』の「裏打紙文書」にも、そのような事例を見いだすことができる。例えば、中央の都察院（監察業務の総元締め）が、科挙の試験会場についての取り決めを所属の関係学生たちに周知するよう、地方官庁に命令を出すといった指令について、政府の公式記録や士大夫個人の文集といった編纂物からその具体相を知ることは容易でない。しかし、「裏打紙文書」を用いれば、次のような指令の流れを追うことができる。まず、発出元の都察院から、割り印つき第某号指令が発出され、その属官である巡按監察御史の手を経て、地方行政のトップである布政使司の属官である経歴司に指令書が送られる。そして布政使司からの通達という形をとって属下の行政単位である府へ、そして府から県へと順次指令が伝え

られ、最終的に大きく貼り出されて関係学生に通達されるというものである。



歴史史料としての「裏打紙文書」

これは、単に文書主義だからここまで分かるというものではない。官品の序列が官僚社会の尊卑関係を規定した中国にあっては、官庁間の上下関係はその長官職の官品によって決まる。そして、官庁間のやりとりに使用される文書には、その発出元と受取手の身分的上下関係に基づいた、「奉」「蒙」「承」といった用字作法や「呈」「咨」「箚」といった文書形式(註)などがきっちりと定められていた。これに加えて、文書の移動経路について、時系列を遡るように記入するという書式(先の例なら、文章冒頭から、県↑府↑「布政使司↑経歴司」↑「御史↑都察院」といった流れが明示される)が用いられた。このようなルールに従った文書作成は、当時の担当者にとっては日常業務の一部として、ほとんど機械的になされたと思われる。ただ、それがゆえに形式的であり、事例を見比べ、共通項を見つけることによって、我々は当時の業務指令の一般的な流れを探ることができ、さらにはそこに反映された当時の官僚社会内部の身分秩序をうかがい知ることができる。

もちろん、『銅人経』の「裏打紙文書」については、その貴重さという点も見落とせない。中国大陸に残る明朝の公文書(「檔案」という)を網羅的に収めた『中国明朝檔案総匯』(二〇〇一年六月、広西師範大学出版社)などが収める明朝の檔案は、明末の天啓(一六二一―一六二七)から崇禎(一六二八―一六四四)年間にかけて作成された軍事に関わるものが多い。また、一般に文書の伝存しやすさは、当該文書の発出者の権威と、受取手にとっての重要度という二つの要素に大きく左右される。その点で『銅人経』の「裏打紙文書」に見られる檔案―地方官庁が定期的な業務として中央に報告していた地方役人の勤怠記録や、財務状況の報告書―は、一定期間後に廃棄される類いのもので、今日にまで伝わることはまず望めない種類の檔案である。つまり、明朝の日常的な姿について多様な考察を可能とするまとまった材料(量については、『蓬左』一〇八号、七頁の猪俣による説明を参照していただきたい)が伝存していること自体が奇跡なのであり、歴史的価値は極めて高いのである。

「裏打紙文書」の整理と今後

既に井上と猪俣による精力的な翻刻作業によって、六万字近い文書の翻刻が形になろうとしており、執筆者もその読解に参加をさせてもらっている。断片化している文書もあり、また文書の順番が出鱈目になっている箇所も少なくなく、何より官僚の日常業務に関しては、現在の研究水準ではまだまだ不明瞭な点が多いため、安易な推測を避けながら慎重に翻刻、読解の精度を上げていく必要がある。

そして、これらの作業の先に浮かび上がる明朝官僚社会の実態は、冒頭に記したような若者がもつ中国の歴史像に対しても、細やかながらも新たな印象をもたらすのではないかと考えている。

(註)文書は、発出元と受取手との関係に基づくと、「上行文」(目上に対するもの)、「平行文」(おおむね同格の相手に対するもの)、「下行文」(目下に対するもの)に分類される。ここで例示した「呈」(呈文)は上行文、「咨」(咨文)は平行文、「箚」(箚付)は下行文である。

齊民要術（せいみんようじゅつ）クッキング

酸肺法に学芸員が挑む！

令和七年度末に、神奈川県立金沢文庫と連携して開催する「金沢文庫本―流離う本の物語―」展の準備にあたり、現在、蓬左文庫に伝わる金沢文庫旧蔵書（「河内本源氏物語」・「斉民要術」・「侍中群要」・「続日本紀」・「太平聖恵方」／すべて重要文化財）の調査を進めています。

『斉民要術』とは？

蓬左文庫に伝わる金沢文庫旧蔵書のなかでも、『斉民要術』はあまりなじみのない資料ではないでしょうか。文献等では「中国・北魏時代、賈思勰（かしきょう）によって記された世界最古の農業書」と紹介されることが多いのですが、実は、当時の農作物や調味料等を使ったレシピも充実しています。

蓬左文庫のものは、中国大陸では既に散逸してしまった北宋時代に刊行された本を写したもので、現存するものの中では最も古い姿に近いテキストと考えられている貴重なものです。

さて、何を作ろう♪・・・？

インターネットで 斉民要術 レシピ で検索すると、いろんな料理がヒットしますが、学芸員としては*原典にあたるべきだと思い、*文献を頼りにレシピを読み解くことにしました。

しかし、現代日本のスーパーでは手に入らない食材も多く、調味料に関しては記述はあっても分量が書かれていません。まれに記述があっても、一般家庭の台所では実現不可能なほど多量なものも多く、「何を作るのか」というよりも、「何が作れるのか」と思い悩みました。

そんなある日、知り合いの研究者が「『斉民要術』にはめっちゃおいしい最古の〈すぶた〉のレシピがあるよ」と言っていたのを思い出しました…。記録に残るほどの〈すぶた〉の味とは一体…気になる！

これは〈すぶた〉なのか？・・・

食材集めようとレシピを読み進めていくと「粳米」という記述を発見…この時点でもはや普段口にしている〈すぶた〉とは異なるものであることを察しましたが、冷蔵庫とスーパーの品揃えを眺めつつ、実現可能なレシピにアレンジしていきました。が、問題は味付け！　分量がわからない以上、料理（味）の全体的なイメージがつかめないこともあって、調味料の分量は調理をしながら検討することにしました。

当時の〈すぶた〉とは・・・？

出来上がったのは、〈すぶた〉というより「豚肉の豆鼓リゾット」という代物。そのまま食べるとうっすら回鍋肉のような味でしたが、そこに酢と山椒を加えることで、さっぱりとした味になりました。

結局、調味料の分量がわからなかったため、自分好みの味付けになってしまい、結果的に「大美」と評されたものと異なるものになったかもしれません。しかし、もしかすると、例えばカレーのように、オーソドックスな料理であったからこそ、作り方や調味料の分量が作り手によって微妙に異なっていた為に、賈思勰は分量を記述していない（できなかった）のではないかとも感じました。

（蓬左文庫　星子桃子）

*蓬左文庫に伝わる『斉民要術』
・金沢文庫本（一六八―二）
・『津逮秘書』第三集 巻四十五―五十（一五四―九）
*参考文献
西山武一・熊代幸雄『校訂 譯註 齊民要術』（三陽社、一九五七年）
田中静一（編訳）『新装版　現存する最古の料理書『齊民要術』』（雄山閣出版、二〇〇七年）

齊民要術卷第八 葅縁等法第七十九

酸肫法（すぶたのつくりかた）

【材料】
- 小間切れの豚肉　適量（本来はブロック状）
- 細切りorみじんぎりにした白ねぎ　適量
- 豆鼓醤　適量
- 水　適量
- ごはん　適量
- 酢　お好みで
- 山椒　お好みで

1 細切れの豚肉をゆでる

用乳下肫。燖治訖、并骨斬臠之、令片別帶皮。

〔乳下（ちのみ）の肫（こぶた）を用（もち）いる。燖治（ボイルして毛を処理）し訖（おわ）ったら、并骨斬（ほねごとき）って臠（ブロック肉）にし、片別（ひとつひとつのきりみ）は帶皮（皮付き）にしておく。〕

ブロック状の豚肉を用意できませんでした…

2 鍋にゆでた豚肉と細切りにした白ねぎ半分と、豆鼓醤を入れ炒める。香りがでたら、食材がかぶるくらい水をいれて煮詰める。

細切葱白、豉汁炒之、香、微下水、爛煮為佳。

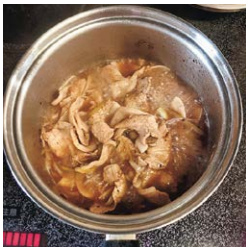
〔葱の白いところを細切（みじんぎり）にし、これを豉汁で炒めて、香りがでたら、微（すこ）し水を下（い）れ、爛煮（につめ）ると佳（よ）いとされる。〕

今回は参考文献にあった「細切り」をチョイスしましたが、食感的にはみじん切りがよいかも。焦げ付きを防ぐためにごま油を少々入れて炒めました。

3 水分がある程度とんだところで、ごはんと残りの白ねぎと豆鼓醤を入れて混ぜ、少し煮詰めて「まぜめし」にする。

下粳米為糝。細擘葱白、并豉汁下之。熟、

〔粳米を下（い）れて糝（リゾット状）にする。細擘葱（しらがねぎ）白と豉汁をこれに下（い）れ、熟（にえあが）ったら、〕



ごはんはあらかじめ炊飯したものを入れましたが、パエリアのように生米を入れる方法もありかも？

4 お米がゆるまない程度に酢を入れ、お好みで山椒をかけて完成。

下椒、醋、大美。

〔椒（さんしょう）と醋（す）を下（い）れると、大美（めっちゃおいし）い。〕

原典試訳
猪俣貴幸（立命館大学）

『汲古』と『汲古会忌辰人名』

『汲古』は当文庫の所蔵する雑賀重良旧蔵書の一で、現在第一～三、五～七号の計六冊が伝わっている。内容は大正から昭和前期（戦時中）にかけて名古屋で開催された、古美術品の展覧会の記録を掲載し、あわせて文化史に関する文献の翻刻を続けた不定期刊行物であった。

現在、博物館・美術館などで開催される古美術展覧会の、名古屋における先駆的な試みとして、再考されるべきものであり、ここに紹介するものである。

『汲古』を刊行した主体は「名古屋汲古会」という団体で、同会は大正六年（一九一七）十月、名古屋に発足した古美術品の所蔵者を主体とした同好者の集まりである。

同会設立の経緯については、会報『汲古』第一号の巻末に大口生（会の主宰者たる大口佩蘭、全三郎）が詳しく述べている。

それによると、大正四年（一九一五）、大正天皇の大典を記念して開催された教育品展覧会の一部として名古屋における歴史的な著名人の遺墨・遺品が展観され、一か月の会期中に五回も展示替をおこなうほどの盛況であった。

同展をきっかけに春秋二回、遺墨展覧会を開催してはどうかと企図されたことが発端となって、具体的な開催方法を探ること約二年。月ごとに尾張名古屋の著名人の忌辰（忌日、命日のこと）をとりまとめ、まずは十月十六日の瑞龍院公（尾張藩二代藩主光友）の忌辰を会日として大正六年十月十六日（水曜日）、ようやく「汲古会」の初会が開催されるはこびとなった。当日の様子について、開催翌日十七日の新聞『新愛知』は第七面で以下のように報じる。

●先哲遺墨展覧会　集まった逸品五十余点

先哲の事蹟を顕彰して未だ知らざる面目を紹介し、併せて先哲の慰霊を慰むる目的を以て、名古屋汲古会主催にて、十六日午前九時より門前町商品陳列館龍影閣に於て、名古屋先哲にして本月が忌辰に当れる人士の遺墨、遺物、著書等の展覧会を開会せり。出陳の遺品は徳川光友、宗春の両卿より学者にては田中道麿、深田明峰、須賀精齋、阿部松園、国枝老足、鷲津毅堂、書家にては久野鳳湫、画家にては浅井南溟、山崎真人等の諸家より俳優宗十郎に至るまで五十余人に達し、天下の逸品尠からず。同会にては今後毎月忌辰の月に当る先哲の遺品を順次展観する計画なりと。

展覧会の会場となった愛知県商品陳列館は、常設の商品見本市会場を設けるべく、明治四十三年（一九一〇）、名古屋市内門前町に新たに建設されたもので、敷地内には本館のほかに和式会堂、洋式会堂と称する集会施設も設けられた。テーブルと椅子を用意したのが洋式会堂であり、和式会堂は和風建築の別棟であった。

このうち和式会堂は、かつて明治十一年（一八七八）に市内總見寺境内に建てられた名古屋博物館で愛知県博覧会が開催された折、品評所として建てられたものあった。商品陳列館が新たに発足するに当たり、この品評所を再利用して龍影閣と命名し、和式会堂としたものである（昭和七年以降何度か移設を繰り返し、現在は熱田神宮境内に現存する）。両会堂は当時、無償で貸し出される規定となっていた。

これにより、名古屋汲古会は初回の開催場所として、ここを選んだものと推察される。その後も数年間、大正十一年（一九二二）夏八月頃までは、一部例外はあるが、ほぼ毎月のように龍影閣を汲古会例会（展覧会）の開催場所としていたようである（商品陳列館報告による）。

これ以後、名古屋汲古会は昭和十年代まで月一回のペースで所蔵品を持ち寄り、連綿と展覧会を開催した。しかしながら開催場所は商品陳列館の後は転々と変わったようで、たとえば昭和八～九年は建中寺、同十～十四年は矢場町の法光寺において、毎月第三日曜日に例会が開かれ、当月忌辰にあたる名古屋先哲の遺作・遺品が展観されている。

名古屋汲古会は開催記録を兼ねた会報『汲古』を発行した。現在のところ、第一号（大正七年七月発行）から第七号（昭和十二年六月発行）まで、計七冊の発行が確認できる。

このうち第一～三号、五号には大正六年十月開催第一回例会から、大正八年十二月開催第二十七

回例会までの陳列品目録、第六号には昭和八年一月〜十二月（第百八十四回〜百九十五回）、第七号には昭和十年一〜十二月開催（第二百八回〜二百十九回）の陳列品目録が収録されている（第四号は横井也有の特集号）。

また、第二〜三号、五〜七号には「稿本金城名家忌辰録巻上」として一月〜六月の忌辰人名と各人物の業績が記される。七月以降（巻下か）の刊行が未完に終わったのは惜しまれる。

会報はいずれも冒頭にコロタイプ印刷による書画の写真を数葉収録し、それに続いて尾張・名古屋に関連する記録類の翻刻、会次順の陳列品目録（作者・題名・出品者を明示）、会員名簿、末尾に会の雑録という構成となっている。

汲古會第一回陳列品目録
大正六年十月分

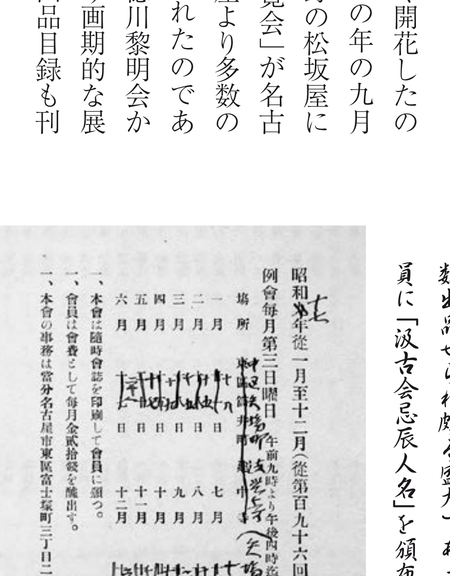
第一号記載の会員名簿（大正七年六月現在）を見ると、総勢二百名の住所と氏名がいろは順に列挙され、冒頭に石田元季、伊藤次郎左衛門（いとう呉服店の当主、後の松坂屋の創業家）の名が並ぶ。「お」のところには「汲古」の編集者である東区裏筒井町の大口全三郎、「し」には愛知郡鳴海町の下郷百松（下郷家のうち本川家初代）、末尾「す」には鈴木半右衛門（戦前名古屋における蔵書家）の名前が記載される。このほか、会員には関戸守彦、富田重助、岡谷惣助など、そうそうたる名古屋財界の重鎮が並ぶのであるが、とりもなおさず、彼らは古美術品の収集家でもあった。

大正年間からの地道な活動が大きく開花したのが昭和九年（一九三四）であった。この年の九月十九日〜二十二日の四日間、東京上野の松坂屋において「名古屋偉人先哲遺墨遺品展覧会」が名古屋汲古会によって開催された。名古屋より多数の出品物が東京へ運ばれて広く展観されたのであり、これに加えて東京に本部を置く徳川黎明会からも多数の所蔵品が出品されるという画期的な展覧会となった。本展についてはその出品目録も刊本として伝わっている。

汲古会は七冊の会報の他に、少なくとも昭和八年〜十四年の間、毎年『汲古会忌辰人名』と称する小冊子を発行していたようである（ただし昭和十二年版は未確認）。これは冒頭に年間の例会（展覧会）の開催日、会場を印し、一月から十二月まで月別に著名人の分野、氏名、号、没年、没日、菩提寺または墓の所在場所を記す。このうち、昭和八年版では鈴木半右衛門による朱筆訂正を加えたものが愛知県図書館に残っており、同会に鈴木半右衛門がかなり深く関わっていたことがみてとれる。

昭和十二年、日中戦争勃発以降の同会の状況は先の『汲古会忌辰人名』の発行以外は明らかではないが、昭和十年代名古屋で刊行された郷土雑誌『無閑之（むかし）』第二十二号（昭和十三年十一月）に、前月（十月）の例会の状況が以下のとおり記されている。

汲古会は十月廿三日（定例第三日曜日）に矢場町法光寺にて例会を開催さる。郷土関係の資料多数出品せられ頗る盛大であった。尚会場にて会員に「汲古会忌辰人名」を頒布せられた。


昭和十七年従一月至十二月（従第百九十六回至二百七回）
例會毎月第三日曜日　午前九時より午後四時迄
場所
一月　日　七月　日
二月　日　八月　日
三月　日　九月　日
四月　日　十月　日
五月　日　十一月　日
六月　日　十二月　日
一、本會は随時會誌を印刷して會員に頒つ。
一、會員は會費として毎月金貳拾錢を醵出す。
一、本會の事務は當分名古屋市東區富士塚町三丁目二番地木村綱芳方にて取扱ふ。

さらには、昭和九年版を元に昭和十七年版を準備しようとした形跡が認められる（筆者所蔵・写真右）など、その後も戦時中まで活動を続けたのではないかと思われる。残念ながらこれ以降の状況は判然としないのであるが、戦争遂行にかかわらないこうした文化的な事業は、戦局の深刻化にともなって継続が困難になったであろうことは、容易に推察される。

（元名古屋市蓬左文庫　井上善博）

参考文献　吉川芳秋著「汲古会と主宰者大口・花橋両翁」（『郷土文化』百七号）

表紙：大-149-1～3　大炊御門経久神宮上卿之記（おおいのみかどつねひさじんぐうしょうけいのき）　3冊
文化15年(1818)～・文政2年(1819)～・文政5年(1822)～　20.0cm×13.8cm

大炊御門家文書（おおいのみかどけもんじょ）

本文書は、①天皇即位、大嘗祭など　②行幸啓　③立太子、立后、宣下など　④元服　⑤元日・白馬（あおうま）・踏歌などの節会（せちえ）　⑥改元儀　⑦法会、葬礼、陵墓、放生会（ほうじょうえ）　⑧伊勢神宮、賀茂上下社、春日大社などの神社祭祀　⑨叙位、任官、拝賀、着陣　⑩朝儀、公事など　⑪家政　⑫文学・文芸に大まかに分類され、節会などの先例を抜書した部類記、伊勢神宮からの文書などがある。総点数は一一五七点、そのほとんどが近世のものである。

本文書を蔵した大炊御門家は、藤原北家師実三男経実（一〇六八～一一三一）を祖とし、代々有職故実を家職とした。中近世には権大納言や左・右大臣、神宮上卿（享保十六年まで神宮伝奏）などに任じられた。神宮上卿とは、伊勢神宮から式年遷宮諸祭や外内宮の神職の叙位などを取次ぎ、それらを天皇に奏上し、その結果を伊勢神宮に知らせた要職であった。近世後期に神宮上卿に任じられた大炊御門経久（一七八一～一八五九）は、文化九年（一八一二）二月二日～五月二十一日、同十一年八月十九日～文政二年（一八一九）二月十九日、同三年二月二十四日～同五年四月七日の三期にわたり務めた。その折、経久は備忘録として「神宮上卿之記」を記したが、現在は文化十五（文政元）年、文政二年、同五年の三冊しかない。

ここでは、文政五年「神宮上卿之記」から、文政十二年式年遷宮の山口祭の日時決定の記述を紹介したい。山口祭は、式年遷宮造営諸祭の最初に所用木材伐出の安全を祈る祭典で、元禄二年（一六八九）以降、式年遷宮の七年前に行われるようになった。

文政五年一月二十一日、伊勢神宮祭主藤波光忠らから経久に山口祭の日時伺いがあった。その伺いを受け、陰陽寮陰陽頭土御門晴親が、山口祭の日時とその正式決定の陣儀をいくつかの候補日から陣儀を二月三日、山口祭を三月七日に選定した。その後、二月三日に行われた陣儀に山口祭の開始時刻が諮られ、内宮は三月七日巳の刻、外宮は同日午の刻に決定し、経久はその後この決定を祭主に通知した。

このように、「神宮上卿之記」は、伊勢神宮から神宮上卿に到来する朝廷への取次内容と朝廷内での決定までの動きがわかる、興味深い資料である。

（蓬左文庫　粕谷亜矢子）

【参考文献】
渡辺修「神宮傳奏の補任について」（『学習院史学』三八、二〇〇〇年三月）
渡辺修「近世朝廷と神宮式年遷宮」（『近世の天皇・朝廷研究大会成果報告集』一所収、二〇〇八年三月）

蓬左通信

現在準備を進めている、神奈川県立金沢文庫との交流展「金沢文庫本―流離（さすら）う本の物語―」は両館の学芸員が長年温めてきた企画です。ありがたいことに両館の縁が「ブラタモリ」で紹介されたこともあり、金沢文庫本への関心が高まってきているようにも感じています。一方で、書かれている内容を理解するには少々難しいテキストも多いのも事実…少しでも親しんでもらえるよう、今号掲載のようなコラムや展示手法を考えているところです。

また、改めて蓬左文庫に残る金沢文庫本と向き合ってみると、日本の歴史を紐解く上で重要な資料として大切に守り伝えられてきただけでなく、研究材料として積極的に活用されていたことにも気づかされました。金沢文庫本が七百年以上をかけて金沢から尾張へと至るドラマティックな物語に注目していただければと思っています。

（蓬左文庫　星子桃子）

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地　TEL(052)935-2173　FAX(052)935-2174
ホームページ　https://housa.city.nagoya.jp/ 〈蔵書検索もできます。〉

ご利用案内

■**休館日**／月曜日（祝日・振替休日のときは直後の平日）※変更することがあります。
令和7年12月15日(月)～令和8年1月3日(土)は特別整理・年末年始により休館します。
■**展示室**／【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）
■**閲覧室**／無料　館外貸し出しはいたしません。
【閉架図書】午前9時30分～午前12時　午後1時～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時
【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。
電話・郵便・メールによる申込みも可。

「蓬左」第109号　☆令和7年6月10日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫　☆年2回発行　☆印刷：菱源（株）